

ラジオ放送
＜令和5年4月～6月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.443

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 自分のこと好きですか（信心ライブ） page 1

- 路面電車の中で（私からのメッセージ） page 5
兵庫県・阪急塚口教会 古瀬真一
- 片腕を失くして page 9
兵庫県・上ノ上教会 平野千鶴
- 捨てられた花でも（ピックアップ） -生と死- page 13
広島県・栗原教会 藤原隆夫
- 愛と安らぎに満ちて（ピックアップ） -生と死- page 17
兵庫県・城南教会 竹部眞理子
- 叔母の介護 page 21
三重県・関教会 松澤和美
- 長女が生まれたときの話（信心ライブ） page 25

- 3月14日（信心ライブ） page 30

- この手のひらのぬくもりは（もう一度聞きたいあの話） page 35
島根県・今市教会 森山恵美子

<こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちょっといい話

- 寄り添いリレー page 39

- 心強い味方 page 43

- グミの木の下で page 47

- 思いのすれちがい page 51

《信心ライブ》

「自分のこと好きですか」

(ナレーション)

おはようございます。今日は、金光教姫路教会の竹部沙矢さんが、令和3年8月に、大阪の玉水記念館でお話しされたものをお聞きいただきます。

皆さん、自分のことは好きですか？

私は、「できる自分は好き、できない自分は嫌い」でした。私は自分に厳しいタイプの人間です。「もっとやれる、もっと頑張れるはず」と自分を追い込むのが、めっちゃ得意です。そして、潰れることも多々あります。潰れる時と

いうのは大抵、「こんなこともできない自分が受け入れられず許してあげられない時です。

一方で、夫に「自分のこと好き？」って聞くと、

「うん！」って即答。「いいところも、足りないところも、ゼーんぶ含めて俺やから」っていうスタンスです。夫を見ていると、生きやすそうでいいなあと思います。

自分を許せない私と、自分を許せて生きやすそうな夫。この違いは何でしょう？ どうしたら自分を許してあげることができるのでしょうか。

夫は、金光教の教会で生まれ育ちました。私は、金光教のことは何も知らなかったんですが、夫といると、とても心地がいいのです。夫は、自分が好きだということと同じように、私のこと

を大好きでいてくれます。夫は、できない私を責めないんです。昔、私が仕事でいろいろあつて、心も体もボロボロの時に、「沙矢ちゃんの、いいところも足りてないところも、ゼーンぶ含めて好きなんやで」と声をかけてくれました。それを聞いた時、心がジーンとあつたかくなつて、自分を責めてばかりいた私が、もうちょっと自分のこと許してあげようかなと思えたんです。そう思えると、ますます心があつたかきも、あつたかきもんなんだな、と感じました。なんとも言えん、あつたかきんです。この時に感じた温かさが、ずっと忘れられずにいました。「いたわる」とか、「慈^{やさしく}しむ」という言葉がピッタリだと思います。

しばらくしてこれと同じ温かさに出合いました。それは、金光教に出合つて、今まで、考えたこともなかった「神さま」について考えた時でした。皆さんは、「神さま」というとどんなイメージがあるでしょう。私は、神さまって、私を含めて、人間のこと、ほんまに愛してはるんやな一つていうことです。

私は仏教の家に生まれ育つて、結婚してから、金光教の先生を養成する学校に入って、どんどん神さまに出会っていききました。神さまの好きなどころは、なんといつても、私の全てをまるっと受け入れてくれるところです。喜びも、怒りも、哀しみも、楽しいことも、どんな気持ちも、神さまは、「おー、そうかそうか」と全て受け入れてくださっていると思っています。

神さまの考えていることが分からなかったら、グイグイお結界に行きます。お結界とは、神さまに、言いたいことを言っていていいところです。お結界には、金光教の先生が座っておられ、その先生が、私から神さまへ、私の伝えたいことを伝えてくださるし、神さまから私へ、神さまの伝えたいことを、口や体のない神さまに代わって、教えてくださいます。人間相手だと、「嫌われたらどうしよう」とか、「今、連絡してもいいのかな」とか、いろいろ考えてしまいますが、お結界に座っておられる先生や神さまに、そんな心配り不要だから楽です。絶対、嫌いになられません。私も何回、「神さまのことが知りたいのに、考えてることが分かりません！」と泣きながら、時には怒りながらお結界

の先生に気持ちをぶつけたか分かりません。お結界の先生の話や聞くと、だんだんに、「えー、私って、めっちゃ神さまに愛されてるやん。こーんなに許されて生きてる私だったんか。コテンパンに自分のこと責めんでも、こんな自分のことでも、ちよつとは許してあげてもええんかな」。そう思えてくるのです。そう思えるのと、「私」という人間は変わらないけれど、「私」を見る私」の眼差しが優しくなる。目の前に広がる現実や変わらないはずなのに、なんだか優しい世界が広がってるように思えてくるのです。

(ナレーション)

いかがでしたか。自分を許せなかったとい

う竹部さん。お結界で教会の先生を通じて悩みをぶつけることで、物事に対する考え方が変わり、現状をより良く捉えることができるようになられました。そうして自分を愛し、生きやすい人生観を得られました。

私自身も、教会の先生に、お結界で悩みを聴いていただくことがあり、先生はしっかりと受け止めてくださいます。そしてつらい中にも、ふと良いことに気づかされることがあって、気持ちの持ち方が変わるのです。

苦悩や生きづらさを感じる時、神さまを頼ることは、生きやすさの第一歩になるかもしれない。



《私からのメッセージ》

「路面電車の中で」

兵庫県・阪急塚口教会 古瀬真一

おはようございます。私は、兵庫県尼崎市にあります金光教阪急塚口教会の古瀬真一と申します。どうぞよろしくお願い致します。

去年の7月、日帰りで京都へ小旅行に出かけた時のことです。私は、目的地に向かうため、路面電車に乗りました。新型コロナウイルスの感染者数は下火になっていましたが、その日は3年ぶりに行われた大きなお祭りの最中だったので、たくさんの方が乗り合わせていました。小さな電車の窓に沿って設けられた長いシートは満席で、通路にもお客さんたちが大勢立っ

ています。私は、運転席の真後ろにある運賃箱のそばにスペースを見つけ、手すりに寄りかかるようにして、ガタンゴトン、ガタンゴトンと音を立てて進む電車に揺られ、車窓を流れる古都の街並みを眺めていました。

駅と駅の距離が短いこの電車は、地元の人にも、観光客にも便利な足になっていて、お客さんたちが頻繁に入れ替わります。運賃は後払いなので、私の目の前で、運転手さんに定期券を見せたり、両替機で崩した小銭を運賃箱に入れたりして降りていきます。

そんな感じで旅の情緒を楽しんでいると、学校帰りと見て取れる、ランドセルを背負った制服姿の男の子が乗ってきて、運賃箱の真横に、慣れた様子で立ちました。小学3年生くらいで

しょうか。

ひと駅ひと駅止まりながら、ガタンゴトンと、のんびり、電車は進んでいきます。

やがて、到着したある駅で、乗客の半数にもなろうかという大勢の人たちが運賃箱の前に列を作り、電車を降りていこうとしています。その行列の中ほどに、赤ちゃんを抱っこし、肩に

大きなかばんをかけたお母さんの姿がありました。片手で赤ちゃんを支え、もう片方の手で小銭を両替して運賃箱に入れると、さっと電車を降りていきました。降りる人の流れを乱さない、このお母さんの早技に驚いたのも束の間、ふと見ると、10円硬貨が1枚、両替機に残っているではありませんか。

あっと思った瞬間、制服姿の男の子が、すか

さず運転手さんに話しかけましたが、残念ながら、遠慮がちに話しかけた男の子の声は、お客さん対応に忙しい運転手さんには届きません。

とっさに私は、「この子が、何か伝えたいことがあるみたいですよ」と、運転手さんに声をかけていました。男の子の親切な気持ちに、私も後押しされたのです。

運転手さんは、少しかがむようにして男の子から話を聞くと、出口へ向かっているお客さんに、大急ぎで呼びかけたので、無事10円硬貨は、お母さんに届けられました。駅のホームでの会話は聞こえませんでした。が、運転手さんから事情を聞いたのでしょうか。明るく笑みを浮かべたお母さんの横顔は、ぱっと幸せに輝いたように見えました。

やがてお客さんの乗り降りが終わると、何事もなかったかのように動き出した電車。その先頭には、運転手さんとあの男の子が、しっかりと前を向いて立っています。心一つにして硬貨を届けた2人の背中は、何だか誇らしさに満ちていて、まるで映画のラストシーンのようでした。

でも、このお話は、まだ終わりではありません。運転手さんは、男の子の降り際に、乗務員用のかばんの中をごそごそ調べると、「さつきはありがとう。これしかないけど…」と言葉を添えて、小さなカードを手渡します。男の子が嬉しそうに受け取ったカードには、素敵な物語が生まれた、この電車の写真が、大きく印刷してありました。

あの日、あの時、たまたま京都の路面電車に乗り合わせた男の子、赤ちゃんを抱いたお母さん、そして、運転手さんと私。ほんのわずかな時間、それぞれの人生が交錯して生まれたワンシーンは、今でもふとした時に、鮮やかに私のまぶたに浮かんできます。

あの時の様子を思い出しながら、どうして神様は、私をあの場面に出合わせたのだろうか、私は、そんなことを考えます。もちろん、本当の答えなんて、分かるはずありません。

思いつくキーワードは、「人を思う心」「神様のように人を慈しむ心」「授かった命を幸せのために使うこと」といったところでしょうか。

あの頃の私は、ニュースで報じられていた、

目を覆いたくなるような出来事を見聞きして、
得体の知れない不穏な黒い霧に飲み込まれてし

まいそうな怖さを感じていました。そんな私に
神様は、「人間には、いいところもたくさんあ
ることを忘れるな」「一人ひとりに、ちゃんと
神様と同じような心が備わっているんだから」
と、そんなことを伝えようとなさったのかもしれ
ません。

あの時、あの電車の中で、私はうれしかった。
幸せを感じていたのです。それはきつと、あの
男の子の思いやりをきっかけに、さつと神様が
現れて、私や運転手さんを包み込み、見事な連
係プレーを生み出すよう、素敵な働きをしてく
ださったからに違いありません。だから私たち
は、あの電車の中で、互いに心が通い合う幸せ

を感じることができたのだと、私は今、そう信
じているのです。

今日は、目には見えない神様と私の関わりの
一端をお話ししました。ラジオをお聞きの皆さ
まが、いつもの暮らしの中で、神様と出会って
くださったら嬉しいです。

《先生のおはなし》

「片腕を失くして」

兵庫県・上ノ上教会 平野千鶴

(ナレーション)

おはようございます。案内役の大林おおばやし まこと誠まことです。

今日は、兵庫県宍粟市にある金光教上ノ上かみのかみ教会、平野千鶴ひらのちづるさんのお話です。タイトルは「片腕を失くして」。ちよつとびっくりするようなタイトルですね。いったい何があったんでしようか。

2年前になります。いつものように会社で仕事をしていると、上司に呼ばれました。緊急の連絡が入ったようです。食品会社に勤める息子

が、職場で螺旋状の機械に腕を巻き込まれ、レスキュー隊が来ている、とのことでした。もうびっくりして、息子の会社に飛んでいきました。

現場にはレスキュー車に救急車、パトカーが止まっており、物々しい雰囲気でした。「今、懸命に救出しているのですが、機械を分解するのに時間がかかっています」という説明を受けて、どうすることもできず、いつもお参りしている金光教の教会に電話を入れて、「どうぞ、なんとか命は助かりますように」と願いました。9月になったばかりで、まだ暑く、汗が出てもいいのに、不思議と汗は少しも出ず、暑さも感じませんでした。私のそばにいたお巡りさんが、自動販売機からジュースを買って手渡してくださいましたが、喉も乾かず、ただただ心臓がバ

クバク脈打っていたのを、今でも忘れられませんが。しばらくして、ストレッチャーに乗った息子が運び出されましたが、薬で寝かされています。すぐに教会に「どうにか命は助かるようです。ありがとうございます」とお礼の電話を入れました。それから、息子と私はドクターヘリで病院に向かいました。

右腕肩から7センチ位のところで切断するより仕方なし、との診断で、手術をしていただきました。手術室より出てきた時に息子のそばに行くことができ、「よかったなあ、生きとるで」と声をかけました。切断された右腕ですが、法律によると火葬する必要があるとのこと、翌日、息子のお嫁さんと2人で、箱に入った右腕を持って火葬場へ行きました。柩くわを載せる台

に右腕が載っているのを見て、「これが体じゃなくてよかったな」と、2人で喜びました。五体満足に生まれてきて34年間使わせてもらってきた右手、よちよち歩きで両手を広げて私に向かってくる姿とか、中学、高校とバレーボール部で頑張った姿とか、3人のわが子を抱っこする姿など、当たり前としてできていたことがありがたかったと思え、神様と右腕にしっかりとお礼を言っ、息子のお嫁さんと2人で大泣きしました。

息子の怪我を、3人の妹妹弟弟をはじめ多くの人が悲しみましたが、当の本人はそれほど落ち込んだ様子も見せず、コロナ禍で面会もできず外泊もできない中、リハビリテーションに3カ月入院し、簡単な義手を使いこなせるようにな

って帰ってきました。会社に復帰してからは、リフトを操作する仕事を任されて頑張っています。

昨年の夏、息子が怪我をする前に所属していた部署の人達の間で、コロナが流行りました。

その部署が止まってしまうと、すべての機械が動かせなくなり、会社が回らなくなってしまったということ。そこで息子に声がかかりました。息子は、片手でできる事は片手で、できない事は人を使ってやり、また、けがをしてからはしていなかった夜勤もし、その局面を乗り切りました。親としては、片手では以前のように十分な仕事はできないだろうし、会社のお荷物になるのではないかと心配するところもあったのですが、「息子さんのおかげで会社を回すこ

とができた」と大変喜んでいただき、息子も「ちよっと株が上がったかな」と喜んでいました。

お荷物どころか、片手でも会社のお役に立つことができたことが、本当にありがたかったです。

また、仕事以外では、身体障害者スポーツ、パラスポーツのサッカーに参加させてもらって、キーパーとして楽しんでます。右腕がなくなり、左手と口を使い何でもやってのける息子に、「大事に使わせてもらいよ。左手を酷使して左手までダメになったらどうするの」と言うのと、息子から「左手も使えなくなったら、足がある」と返ってきました。そういうもの捉え方をさせていただけることがありがたいなあと、神様にお礼を申した次第です。息子の怪我以来、毎日、今日一日みんなが元気に過ごせた

こと、病院に駆けつけることもなく無事に帰宅できたことのお礼が、心から言えるようになりました。

(ナレーション)

いかがでしたか。息子さんの凄絶せいぜつな事故、母親としてはどんなに辛かったですよね。その思いがひしひしと伝わってきました。それでも、命が助かったことが分かると、すぐに神様にお礼を申し上げたと言われます。切断了腕とお別れする時も、長年お世話になってきたことが心からありがたく思えたという。そして息子さんご本人も、失ったものを嘆かず、残ったものを最大限に生かそうとしておられます。平野さんのご家族がそんな明るい心でいられるのも、

私たちの体は神様から頂いたものだという、揺るぎない信念が備わっていたからではないでしょうか。

考えてみれば、私たちの体は、どこもかしこも、無くては困るものばかりです。普段、何とも思わずに使わせてもらっているこの体。左手で右腕をさすり、右手で左腕をさすり、頭も顔もお腹も足もなでさすりして、毎日お世話になっていることにお礼を言いたい気持ちになりました。

《ピックアップ》テーマ…生と死

「捨てられた花でも」

広島県・栗原教会 藤原隆夫

(平成6年12月14日放送)

典子さんは長男が2歳の時、生後半年の長女を劇症肝炎（びやくしやうかんえん）という病気で亡くしました。掌中（しやうちゆう）の玉を奪われ、何も手に付かず泣き明かす彼女に、実家のお母さんは「家へ帰って養生せよ」と言い、主人もその両親も心身の健康を気遣い同意しました。

しかし彼女は、毎日赤ちゃんのお墓の花を替えると言って自分の部屋へ引きこもり、小さなお骨の箱の前から片時も離れませんでした。みんながそれぞれに悲しみ悩みました。

その家族は、私が奉仕する栗原教会へ参拝しています。典子さんは結婚当初、お父さんから「あなたも参ろう」と言われ、宗教に無関心であっただけにびっくりしました。型にはめられそうで恐ろしく、気が重かったのですが、母親に連れられ参拝し、私たち夫婦や信者の人々と接してみても不安が解消し、安心して時々参拝していました。赤ちゃんを失って嘆き、ふさぎ込んだ彼女に参拝を勧めていましたが、何カ月も経ってやっと教会へ顔を見せました。

私はどうしたら閉ざされた心が開けるか神様にお願ひしながら、一生懸命、話を聞いてもらいました。彼女も教会へ行っても仕方がないと思いつつも、少しは気持ちの整理や転換ができれば、ともかく足を運ぶことにしたようです。

その日から時々、参拝が始まりました。

わが子の死という大きなショックを乗り越えるのは大変なことでした。

「人間は神様に生かされている、生きるのも死ぬるのも天地の間の出来事である」と話したら、「神様が人間を生かすのなら、どうして私の子を死なせたのか、あの娘を殺して何が生かす神か」と、反抗心をあらわにして泣いたこともあります。

私は自分の体験を聞いてもらいました。私も生まれて1週間目の男の子をメレラという病気で亡くしました。葬式の祭壇へ鯛をお供えして、この子はこの魚の味も知らずに死んだと思っただ途端、悲しみが突き上げて、泣き伏し、嗚咽おえつしました。

私たちは深い悲しみの日々を送っていました。ある方から、「稲でも実らぬ実があるように、その子に与えられた命がもともと短かったのかも知れぬ。あなたが泣くとその子も嘆く。死んでもそれは天地の神様のお働きの中での出来事である」と聞かされ、子どもの死を納得したことがありました。このような話を聞きながら、典子さんも少しずつ明るくなっていきました。

私は、彼女が子どもの頃からお花の稽古をし、それが大変好きだと聞いていたので、またお花の勉強をしたらどうかと話しました。彼女もそれを続けたい気持ちを持っていました。うです。しかし、結婚し家庭を持ち、お稽古事をしたいと申し出ることをはばかり、また、お

世話になった師匠を変えて、別の先生に習う気にもなれず諦めていました。

ところで、私の教会には文化教室として華道部があります。そこへ来ていただくお花の先生が、たまたま典子さんが子どもの頃から師事した先生でした。それを聞いて驚き、神様が師匠に再び引き合わせてくださったと感じて、改めて主人や両親に「習わせてほしい」と頼み、家族も了解してくれ、お稽古を始めることになりました。

こうして仕方なしの参拝が、信心とお花の両方を勉強する自ら進んでのものとなりました。もともと好きで京都の華道の専門の大学へ行っていたので上達も早く、やがて師匠から勧められ、近所や知り合いの人にお花の教授をするこ

ととなりました。

私は彼女にたびたび「お花の稽古は神様があなたに与えてくださった道だから、信心を抜きに動いてはいけない」と話しています。

気晴らしにと思つて再開した花の勉強ですから、信心を抜きにして考えてはいけないという意味が、初め分りかねていたようです。しかし、華道界の先生方とのお付き合いや同門の社中の人々との人間関係の難しさに出合つて、何事も神様にお願ひしながら問題に対処せねばならぬと気づき、信心の大切さを本格的に理解するようになりました。

お弟子さんが生けた花を手直りする時、いつでも一瓶一瓶、花の前に座つて手を合わせ、「私の手を通して直させてください」と祈ります。

すると、自分でも不思議なように手直しする箇所が見えてくるのだそうです。そこへ自然に手が行って、そこを直すと花が生き生きしてきます。「ほら、こうすると、この花が喜んでくれるでしょ」とお弟子さんたちに語ります。

最近、家元社中の支部の青年部の幹部として活動し始めました。年に数回、各種の華道展があり、生徒さんの指導をして出展させ、自分も花を生けますが、毎回どう生けようかと作品の構想を練り、悩みます。頭の中が真っ白になったような時、神様をお願いしていると、材料になる花が目に残り、作品が生まれます。

ある時も、人のお世話で忙しくバタバタしていて、自分が生けようと花の置き場へ行ったら、人に良い花材を取られ、めぼしいものが無く、

残ったものばかりを集めて苦勞して組み合わせ、ごみとして捨てられていた花を拾い出して、神様をお願いしながら生けました。作品として仕上がってみると、捨てられた花が案外ポイントとなって全体を引き立て、評判になりました。「花が喜んでくれた」と神様にお礼を申し上げたことでした。

お稽古に来る人たちの家庭の愚痴話に夜更けまで時間を取られ困りながらも、話を聞いてあげ、喜ばれ、教会で聞いた話も伝え、明るい考え方をしようと励ましています。

生きていく氣力を失っていた彼女ですが、その後、次女にも恵まれ、趣味を生かし、神様と共に生きることを知って、今、生き生きと輝いています。

《ピックアップ》テーマ…生と死

「愛と安らぎに満ちて」

兵庫県・城南教会 竹部眞理子

(平成9年1月29日放送)

最近、新聞、テレビでホスピスという言葉がよく取り上げられるようになりました。

ホスピスとは、治る見込みのない末期癌がんの患者を主に、最後までその人の生を支えるために、専門的なケアをする施設やプログラムを意味しています。

そのホスピス病棟が、姫路にも昨年の5月に開設され、時を得たようにして、Sさんという女性が、6月18日、入院することになりました。

Sさんのお母さんは、熱心に金光教の信心を

され、信仰を支えにして、5人の子どもたちを育ててきました。Sさんも小さい時はお母さんと一緒に教会へ参拝していましたが、成人し親元を離れると、次第に教会への参拝も遠のき、1年に数回、お参りするだけでした。健康と仕事に恵まれたSさんは、趣味のピアノや書道にも打ち込み、学ぶこと、仕事をするのが楽しい毎日です。

しかし、2年前から、少しずつ身体がいつものように動かないことを感じ始めたのです。日曜日には、仕事に必要な英会話の勉強を1日中続けていたのに、1時間もすると気力がなくなってきました。足の痛みもどこか異常な感じがあったために、思い切つて病院に行くことを決心しました。

その年の12月、検査の結果、「肺癌^{がん}で、すでに骨に転移している」という医師の言葉でした。さらに、余命わずかと宣告され、絶望の淵に立たされたSさんでしたが、望みを失わず、癌に良いといわれる民間療法と食事で、進行を抑えていこうと決心し、実行しました。

どうしてこんなことになったのか、あと数カ月の命をどう生きていけばよいのか、問題を抱えながらSさんは神様に祈り続けました。45歳という、まだ肉体的に若いほうのSさんの癌は、本人が思ったよりも早く進行していききました。痛みは日毎に激しくなり、ついに入院をしなければならぬ状態になってきたのです。

金光教の信心を通じて知り合った私は、Sさんが自宅で療養をしていた昨年6月、初めて

お見舞いに行きました。モルヒネで痛みをコントロールしている状態でしたが、時折、激痛が走るようで、苦しい表情から痛みの強さが伝わります。励ます言葉もなく、何もできない無力感を感じながらも、少しでもSさんの心が安心を得て、痛みが和らぐようにと祈らずにはおれない気持ちでした。2回目の訪問の時、「一緒にお祈りをしませんか」と言ってみました。何かホッとした様子で、「お願いします」と答えてくださり、2人で手を合わせて、一緒にお祈りしました。

私が子どもの頃、頭が痛くなったり、お腹が痛んで休んでいると、母や祖母がそばに座って、神様に祈りながら、看病してくれました。その時の安らぎと安心感は、今もなお懐かしく、私

の心を温かく包んでくれるものがあります。

あの時のように、ほんの少しの時間でも、Sさんに安らぎの心が生まれてくるようにと祈りながら、一緒にお祈りをさせていただきました。しかし、もはや自宅で痛みのコントロールを続けることは難しく、開設までもないホスピスへ移ることにになりました。

死は、恐ろしいもの、忌み嫌うものとして、生活から遠く離れたものになっていきましたが、現在は死について考える、という機会が増えてきています。金光教では、「人間は神様の働きの中で生まれ、生活し、死んでいくのである」と教え、「生きている間も死んだ後も、天と地とはわが住み家である。生きても死んでも天地のお世話になることを悟れ」と説いています。

つまり、人間はどこまでも天地の神様の働きを離れては存在しないのであるから、死を恐れず、受け入れていくことが大切だと考えています。

一般的には、年を取ることと平行して、身近な人たちの死に出合うことが多くなってきました。大切な人との別れは辛く、そこで、ようやく自ら死を意識し始め、命について考えるようになってきます。生活に追われて忙しく過ぎていく毎日から、今日一日、与えられた命をどう生きるか、生きていけばよいかということをし「死」によって考えさせられるのではないのでしょうか。

Sさんも、突然の死に直面する中、母親の祈りを思い起こし、3カ月間の入院生活での毎日、生かされて生きていることの御礼と、身近

な人たちの幸せと助かりを祈っていかれるようになりました。お見舞いに行つて、Sさんが声を出す気力がない時は、私一人で祈りの言葉を唱えます。

その時、Sさんは手を合わせ、一緒に祈つてくださいました。

いつも自分に厳しく生きてきたSさんは、家族から見てもっとゆつたりと生活をすればよいのにと、思う一面があります。それが次第に温和な人柄に変わつていき、とても穏やかな表情を見せるようになったのです。

ある病院の先生の著書の中に、「人は本当に、生きてきたように死んでいく。しっかりと生きてきた方は、しっかりと亡くなつていき、人々に感謝して生きてきた人は、私たちに感謝して

亡くなられ、人々に依存して生きてきた方は、私たち医者や看護婦に依存して死んでいく。今までの生き方が、その人の死に方に見事に反映される」と書かれていました。

「もう、すべての手は尽くされました」と医師に宣告されてから一週間、Sさんは家族が祈りを込めて作った重湯おもたがいただけ、親しい人たちと言葉を交し、笑うこともできたのです。

信心を求め、心の安らぎを得て、しっかりと生きたSさんの最期は、本当に愛と安らぎに満ちていました。

短い間の触れ合いでしたが、改めて、自分の生き方を考え、死について、思いを深めさせられた出来事でした。

《先生のおはなし》

「叔母の介護」

三重県・関教会 松澤和美

(ナレーション)

おはようございます。案内役の大林おおばやし まこと誠です。

今日は、三重県にあります金光教関教会、松澤和美さわみさんによる「叔母の介護」というお話です。松澤さんは、認知症になった叔母様を家族として受け入れ、介護に取り組んでいます。ではお聞きください。

私の生活の場は金光教の教会です。娘2人が嫁いでは、教会長である夫と、夫のお母さん、1番下の娘と、4人で暮らしていました。

3年前、そこへ、お母さんの妹、私たちの叔母が家族に加わりました。それには、こんな経緯いきさつがありました。

事の始まりは、叔母の大腸がん。腹腔鏡手術ふくくうきょうじゆによる治療となりました。手術は無事に成功し、術後の経過も順調でした。

ところが、もうすぐ退院という時、突然「危険きけん」の連絡が入ったのです。夫もびっくりして病院へ飛んでいきました。その時の叔母は、意識はあったものの、目は斜め上を向いたままで、右手がわずかに動くだけ。脳梗塞のうこうそくでした。それでも皆の祈りが通じたのでしょうか。1カ月半後、叔母は自分の足で歩いて退院しました。

その時、私たちも久しぶりに、京都にある叔母の家を訪ねて気づいたのですが、叔母は、入

院する前から軽い認知症だったようです。とい
うのは、あちらこちらにメモ書きが貼ってある
のです。そして、メモ通りに生活できない様子
が伺えました。ごみの始末も難しいようでした。

これでは、とても1人にしておけないからと、
90歳になる夫の母が泊まり込みで、お世話に行
きました。3週間が過ぎた頃、お母さんが1度
帰りたいと、交代を頼んで帰宅した深夜、事故
が起きました。叔母が自分でお風呂にお湯を張
り、溺れかけて救急搬送されたのです。幸いこ
の時もまた、20日程で無事退院できました。で
も、これを機に認知症はぐんと進みました。も
うお母さん1人では何ともなりません。夫は、
「教会で預かるう」と言いました。私は「でき
るかな…」と思いましたが、家族で相談し、お

母さんが元気なうちは、叔母と一緒に暮らそう
と決めました。

さて、叔母を迎えるに当たり、心によみがえ
った言葉があります。それは、私が子育てに追
われていた頃、金光教の小冊子で見た、尊敬す
る女性の先生のお言葉、「機嫌ようさせていた
だきなさい」という一言です。子育てに関わっ
てのお話でしたが、何か事あるたびに私を導い
てくれました。この時、改めて、「そうだ、機
嫌ようさせていたどころ」と思ったのです。

もう1つ、私を支えてくれた言葉があります。
それは、ほとんどの人が、「大丈夫？」と心配
してくれる中、2番目の姉だけは、「あなた、
それは、ようようみてあげなさいよう」と言っ
たのです。この一言には驚きました。なぜなら、

姉には過去に壮絶な介護経験があったからです。

姉は結婚して程なく、縁あって、高齢の認知症のご夫人をお世話することになりました。今から50年近く前のことで、当時は介護制度もなく、ヘルパーさんもおられず、一切を家でお世話するのが当たり前でした。今のように紙おむつもありません。洗濯だけでも大変です。子育てに手がかかる上に高齢者の介護、それは容易なことではありません。聞き知る限り、想像を絶する苦勞でした。その姉の言葉なのです。驚きと共に、心に深く刻まれました。

姉はちよくちよく電話をくれます。叔母と暮らすようになって1年が経った頃、姉に、あの時どいう気持ちで言ったのか尋ねてみまし

た。すると、姉は自分が言ったことを覚えていないのです。「えーっ、2回、3回繰り返したのにな？」。2度目のびっくりです。少しの沈黙がありました。姉は昔のことを思い出していたのでしょうか。しばらくして、「頑張ってたから自分が助かっていくから」と、ポツリと答えました。その言葉に、自然と涙が溢れました。これからの介護にも、先の楽しみができたように思えました。

現在、叔母は週に6日、デイサービスに通っています。私のサポートできることは一部ですが、「機嫌よう」そして「ようようみさせてください」との思いで、日々笑顔で接するようになっています。

叔母はこちらへ来てから、朝、夕方、夜と、

教会のご神前に参拝します。教会長である夫に丁寧にあいさつし、ちよっぴりちんぷんかんぷんな話をしています。その後ろ姿を見ながら、「叔母の一瞬一瞬に不安がなく、皆が機嫌よく過ごせますように」と願う毎日です。

(ナレーション)

いかがでしたか。叔母様と一緒に神様にお祈りし、その後のとんちんかんな会話を、後ろから温かく見守っているという最後のシーンが、とても印象的でした。ご主人もきつと優しく微笑みながら、その会話にお付き合いされているんですよ。

松澤さんは、「機嫌よく」という言葉も、「ようようみてあげなさい」という言葉も、神様の

お言葉として、うやうやしい気持ちで受け止めていかれたのではないのでしょうか。神様が介護を託すにあたって、「どうか頼むぞ」と願いをかけてくださっている。神様のような広やかな心で、お役に立たせていただきたい。そんな思いがあるからこそ、いろいろとご苦労もあるはずの介護生活を、穏やかな気持ちで送ることができられるのでしょうか。「自分が助かっていく」というお姉様の言葉は、そういう意味なのだろうと思います。

《信心ライブ》

「長女が生まれたときの話」

(ナレーション)

おはようございます。今日は、金光教本部にお勤めの竹部弘たけべ ひろしさんの、令和4年7月22日のお話です。

その前に、ちよつと解説を。

金光教の本部には礼拝施設れいはいがあつて、本部ほんぶ広前ひろまへと言います。ここでは祭典などが行われ、また、いつでも自由に祈りを捧げることができま
す。そして、この広前の裏山、石段を81段のぼ上つたところに、金光教の創始者のお墓があつて、それを教祖きょうそ奥城おくぎと言います。ここも、誰でもお参りできます。

それでは、お話をどうぞ。

長女出生時の、私どもの第1子でもありませんが、27年前のことですけれども。懐妊のことが知らされまして、予定日が4月7日でありました。夫婦でお腹に向かつて、「暖かくなつて春になつたら出ておいで」と呼びかけながら、また、あるいは、朝6時のご祈念に夫婦でお参りしまして、そのあと奥城をずっと回らしていた。そのうちお腹が大きくなって、体が重くなってきますと、教祖奥城に上がります階段を、後ろをこう押していくように、いろんなことをしながら日が経っていきまして。で、妻は里の教会に戻って出産を迎えさしていただくということで、少し前に九州へ帰っておりました。

4月7日、予定日が来ましても、特に何も知らせはありません。「初めての子どもは遅れるもんだ」というふうに聞いておりましたので、「ああ、そんなもんなあ」と思っております。た。8日も何事もなく過ぎまして、9日の朝、里のお母さんから電話がかかりました。「昨日の夜、産気づいて、病院へ入りました」。ええ、男ってというのはのんきなものでしてですね、「昨日の晩から入ってるのなら、今日のお昼ぐらいには生まれるのかなあ」と思いながら、その日は御用に出ましてですね、夜の8時40分か45分かという頃だと思えますけれども、帰りましたら、留守番電話の印がついておりました。「ああ、やっと生まれたのかなあ」と思って留守番電話の伝言を聞いてみますとですね、あちらの

弟さんでした。「入院して一昼夜経っても、まだ生まれません。母子ともに弱ってきておりますので、緊急に帝王切開、手術になりました。おそらく9時過ぎぐらいから始まると思います」という、それだけが入っております。

ねえ。豈あにはか図らんやというのはこういうことですね。予想もつかないことになりましたね、それで、またすぐにこの本部広前に取って返しましてね、ご祈念をさせていただきました。参拝者席、もう誰もおられなかったと思えますね。ひとりでご祈念させていただいております。雑念が湧きます。「どうしてこうなるかな」と。しかしですね、心の中は、金光様、親先生、双方の両親、自分たちはもちろんですけど、多くの方々のお祈りを頂いてきておることだから、

悪いことになるはずがない、という思いが半分以上。でも何割かは、「心配だなあ」という思いがですね、「困ったなあ」というような思いがあります。

あちらの弟さんのね、留守番電話を聞いてすぐ、こちらから折り返し電話をしました。そうしたら、今度は里のお父さんが出られましたね。「うん、そうだ。手術になったんだ。帝王切開ていうても、最近はそんな大した手術ではないんだから」と言われたのを、その声を思い出しましてですね、ご祈念しながらその言葉を思い出して、「ああ、そうだそうだ」と安心の心が、ふうっと大きくなる。ところがお父さんがまたそのあと続けてですね、「でも、手術は手術だから」と言っ、その声がまたなんとくぐ

もったように聞こえてきてね、それでまた心配の心も出てくる。

まあ、そんな思いを行ったり来たりしながらご祈念さしていただきまして、そのあと本部広前から今度は教祖奥城へ参りましてね、引き続きいてご祈念させていただいておりました。どれぐらいご祈念していたか、時間はちよつと分かりませんが、その途中で、「何事も皆、神の差し向け」と、聞こえたような気がしました。もちろん普通に聞こえたんではありません。聞こえたんではありませんけれど、ふと思った、というのとも違うような。なんでしょうね。からだ全体の中で、なんか響いているような、そういう、はっきりと言葉なんですな。「何事も皆、神の差し向け」。

「差し向け」っていうのは、まあ古い言葉ですわね。「送る」とか「遣つかわす」とかいう意味

ですね。神様がこの事を送ってこられているんだ。そしてまたそれは、神様の思い、人の助かりのために、神様の思いと働きが動き出しているということでもありますね。「ああ、この手術は神様からのお差し向けでございますか。ああ、そうでございますか」と、ねえ。今この時に、世界中でどれだけの子が出生しているのかわからないけれども、この親子にはこの手術が1番いいのだ、というものを、神様が送ってくださいっておるんだなあと。ああ、そうでございますかと。ああ、ありがとうございます。では、その神様からのお差し向けのこの手術が成就いたしますようにと、そういうふうにご祈念

の向きが少し変わりました。心の向きも変わりました。

そういうことで、ご祈念を済ませまして、宿舎へ帰りまして、しばらくしましてから電話がかかってきました。また、あちらのお父さんからでした。「生まれだよ」。無事生まれました。

「女の子やった。器量よかばい」と、ねえ。器量ええぞ、ということまで言うてくださいましてね、ああそうですか。今度は宿舎のご神前でお礼のご祈念をさせていただきます。

これは27年前の長女出生の時のことでありまして、すけれども、しかし、人間生きている限り、いろいろなことが起こってまいります。その時に、ああ、生まれる時に「神の差し向けだ」と言っていただけだけれど、あれは、あの時だけのこ

とではなかったんだなあ。今、この時にも、そのことが、その神様の願い、あるいは「これを分かりなさいよ」と言われた思いが、今もその中にあるんだろうなあと思わされることが、たびたびありました。まあ、その真っ最中であるということでございまして、続きはどのようになりますか。

(ナレーション)

いろいろな出来事の向こう側に、神様の働きと願いを感じ取ってこられた竹部さん。これからも何があっても無くても大丈夫。だって神様が一緒なのだから。そんな明るい力強さを感じました。



《信心ライブ》

「3月14日」

(ナレーション)

おはようございます。今日は、岐阜県みなみ南大垣おおがき教会の今西寿彦いまにしとしひこさんが、令和4年7月に、愛知県で行われた金光教の集會でお話しされたものをお聞きいただきます。

お話の中で「お広前ひろまえ」という言葉が出てきますが、「お広前」とは教会で神様を拜む場所のことです。

私どものお広前にお引き寄せを頂いている、50代半ばのAさんという女性の方がおります。

そのAさん、3年前の3月14日、息子さんの県

立高校の合格発表の日を迎えました。この3月14日というのはAさん夫婦の結婚記念日でもありました。

受験後、息子さんは手応えがあったように言っていましたので、結婚記念日と高校の合格と、ダブルの喜びの日となると信じておったんですけれども、待てど暮らせど私のもとに連絡が入ってきません。こりゃもしかして、とよぎりましてですね、改めてご神前でご祈念をしておりますと、お昼過ぎにようやく、暗い表情をしたAさんが1人でお広前に入ってきました。その様子を見ればもう結果は聞かずとも分かります。

「先生ダメでした。ここまでご祈念してくださいまして、本当にありがとうございます。」

これが結果ですから、私立の高校入学の手続きをさせてもらいたいと思います」と、涙ながらにお届けをなさるわけであります。

教会にお参りしている同年代の子どもたちもほとんど皆、合格していった、そういう中でその彼だけが今回、不合格ということになりました。だから、Aさんは教会に来る時も、皆と顔を合わせるような時間を避けてお参りに来られたりとか、近所の人ともですね、何とか会わないように会わないように生活をするというふうになっただけです。いつしかAさんから笑顔がなくなっていくたんですね。

悪いことってというのは重なるものであります、5月に入りまして、昔から仲良くしておりました友人が重い病気に罹かかったということを知

らされます。ほどなくして亡くなってしまいました。さらに8月、今度は自分のお兄さんが仕事中に倒れて、その日の夜遅くに亡くなりました。もともと持病を抱えておりましたけれども、まさか亡くなるということは思ってもいりませんでした。「何でこんなことになるんだろうか」と、こう思うんですね。

そのお兄さんは誰からも信頼が厚くてですね、実家のお母さんの世話も一生懸命してくれて、そういうお兄さんでありましたから、そのお兄さんを亡くすというのは、Aさんにとって非常に大きな痛手であったわけです。で、「こんなことになるんなら、兄じゃなくて私が死んだほうが良かったです」と、こう思えてくるんですね。そんな思いをしながら、悶々もんもんとして

生活をしていくんです。

で、私は、神様がなさることに無駄ごとはないと、こう信じるんですけれども、立て続けにこういうことが起きてまいりますと、ちょっと言葉が出せないですね。とにかく、心を神様に向けていくということだけを、お話しさせていただきます。ただいでいました。

(ナレーション)

しかし、今西さんの話をいくら聞いても、Aさんは納得できませんでした。だんだんと教会へも足が遠のいていきました。

そして、私としては、Aさんが神様の御働きを感じてくれるように、心を神様に向けられる

ようご祈念を続けるしかないと思って、そんな日々を過ごしてきました。

そうこうして約1年が経とうとした6月、Aさんはですね、何かスッキリした表情でお広前に入ってきました。

「実は昨日、亡くなった兄が夢に出てきました。ソファでにっこりと笑ってくれました。こんな私がしていることでも、兄は喜んでくれます。これまで思い通りにならないことが多くて、神様にも心が向きませんでした。心も体も大切にして、兄に代わって私、親孝行がしたいです。死んだほうが良かったと思いましたが、けれども、私、やっぱり生きたいです。これまでものお詫びと、ここからしっかりと信心を進めたいと思いますので、どうぞ先生、これからよ

ろしくお願ひします」という、そういうお届けをしてくれたんです。

Aさんは、自分が教会から足が遠のいている間、自分のお母さんが、Aさんに代わって一生懸命お参りしてたということを知ります。「ああ、ありがたいことやな、もったいないことやな」と感じるわけですね。そして身の回りに起こってくるのが、一つひとつ全て本当にお繰り合わせいただいているということを感じるようになっていました。自分が心を神様に向けていくようになる、こういうことになるんだなあということが、段々、納得できるようになったようなんです。それで以前のように元気にお広前に足を運べるようになってきました。

(ナレーション)

ある時、Aさんは、いつにも増してニコニコしながらお広前にやって来ました。

息子さんが指定校推薦で大学に進学することになったのです。息子さんは、将来、お父さんと同じ保健体育と特別支援の教員になりたいと思っていて、そのための資格が、その大学で取れるというのです。

「はあ、本当良かったなあ」と言うてですね。3年前の3月14日、泣きながら、ここから辛い日が来るなど。先がどういう姿になっているのか誰も分からない。本当にどうなるんだろうかっていうことの中で始まった3月14日でしたけども、3年近く経って神様はですね、こういう

ステージを用意してくださっていたかというふうに思いますと、ほんとに2人で泣きながら、ご神前でお礼のご祈念をひとしきりさせていたのだのであります。

(ナレーション)

いかがでしたか。

息子さんの受験や、友人、お兄さんの死というつらい出来事が起こってきましたが、そこには神様の「どうか助かってほしい」という思いがあります。

私たちがその思いに気づき、心が助かることを、神様は手を差し伸べながら、ずっと待っておられます。

どんな時も良いようにしてくださいと神様を

信じ、放さず、今、生かされていることに感謝して、神様に心を向けていくことが大切です。そこから助かりが生まれ、Aさんのように人生の大きな支えが頂けるのだと思います。



《もう一度聞きたいあの話》

「この手のひらのぬくもりは」

島根県・今市教会 いまいち 森山恵美子 もりやまえみこ

(平成24年10月31日放送)

昨年の夏、仕事で名古屋に行く機会があった。仕事自体は夕方5時には終わる予定だったが、往復12時間の日帰りはきつい。そこで、近くに住む兄夫婦の家に泊めてもらうことにした。夕方、マンションに到着すると、義姉あねがテーブルいっぱいの手料理を用意して待っていてくれた。

しばらくは、互いの近況を報告したり、両親の様子を伝えたりと、たわいのない話が続いたが、夜も深まり、お酒も入ってくると、話題は

小さい頃の思い出話へと移った。

「なあ、あれ覚えてるか？ お前が家出した話！」と兄。「ああ、あつたね！」と私。

2人で家出したのに、誰にも気づかれず、いつもの広場にいたところを、「ラーメン伸びるよ」と母に呼ばれて、あっさり帰宅したこと。ハムステーキをステーキだと思いこみ、コンビニーフをケチャップで炒めたものをハンバーグだと思っていたこと。母の留守中、父が決まって作ってくれるバターライスをフライパンごと囲み、「かかれ！」の号令で、スプーンで取り合おうようにして食べるのが楽しかったこと。兄が初めて1人で散髪屋に行った時、「お利口だったね」と、アイスクリームをくれた店の人に向かって、「うち、3人兄弟なんです」と言って、

ちゃんと私と弟の分もアイスをもらって来てくれたことなど。

兄とゆっくり話すのは本当に久しぶりで、私は普段の生活を離れて、ただの妹の顔に戻り、3人でよく食べ、よく喋った。

兄がデザートを配りながら、ふと手を止め、「なあ、お前、母さんがアイスクリーム好きなの、知ってた？」と私に尋ねた。「ああ…。バニラのアイスクリームでしょ。私もまた実家に住むようになって、母さんが自分のために買い置きしてるのを見て、初めて知った」。「なあ。実は俺も知らなかった。子どもの頃、俺たちの前で一緒におやつを食べるところ、見たことなかったもんな」。

私たち家族は、小学校低学年まで岡山で過ご

し、祖父母が年を取ったので、父の実家である島根に引き上げた。舅姑との同居に加えて、低く重たい雲に覆われる山陰の冬に、母はなかなかなじめなかっただろうし、地縁、血縁を重んじる独特な土地柄も少なからず負担だったに違いない。また、家族も5人から7人の大家族になり、食事作りにしても、限られた予算の中で、年寄りと子どもの好みそうなものを、手を替え品を替え、必死で工夫していたに違いない。

「守られていたんだね…。うん、本当にそうだね」。

たくさん叱られ、たたかれもしたが、世の中の大抵の親がそうであるように、ピンチの時は、誰よりも味方だった。熱を出せば、夜通しそばに付いていてくれた。苦しくて目を覚ます

と、「ん？ 起きた？」と、のぞき込む顔があり、胸に手を置いて、とん、とん、とん、とたたいてくれた。その手のぬくもりを感じると、ほっとしてまた眠りにつくことができた。手を伸ばせば、いつも近くにあったぬくもりを、母はどんな思いで差し出してくれていたのだろう。私たちは、そのことにどれだけ気づけていただろう。

兄は、阪神・淡路大震災の年に結婚した。そのきつかけを、こんなふうに話してくれたことがある。広島にいるいとこの結婚式に出席するため、3日間の休暇を取っていたところ、1月17日早朝、あの大地震が起きた。交通手段が寸断され、結婚式への出席は諦めざるをえなかったが、兄は単身、神戸へ入り、予定していた休

暇の3日間を、避難所でボランティアとして費やした。そして明日は名古屋へ帰るといふ日の夕方、凍^{ひや}てつく冬空の下、夕陽のグラウンドを、老夫婦が手をつないで歩く姿を見た。その時、兄は、「ああ、何もかも無くしても、生きていける限り、人にはできることがあるんだ」と思ったという。

何もかも無くして、先が見えない状況でも、そばに手をつなぐ人がいることが、手から伝わるぬくもりが、どれほど力をくれるだろうと。そのぬくもりが、また歩き出す力をくれることがあるかもしれない。家族を持つとう。自分も、誰かの支えになり、ぬくもりになりたいと思っただのと言う。それから間もなく、「結婚したい人がいる」と、今の奥さんを島根に連れて帰

つて来た。そして今、目の前にいる2人は、時には親友のように笑い合い、助け合い、長年連れ添った家族の顔をしている。

長い夕食はお開きとなり、義姉が用意してくれた寢床の中で、1人、自分の手を見つめながら思った。この手のひらのぬくもりは、たくさんの人から受け取ってきたものでできている。そして、それはこれから出会う人や、ものに、そっと手渡していかねばならない。祖父母から、父や母へ、父や母から私たちへ、命を通して伝えてくれてきたように。それは、命をいただいた時からもらっている、神様からの課題のような気もする。

とりあえず、明日、駅に着いたら、バニラのアイスクリームを買って帰ろう。そう思いなが



《こころの散歩道》

「寄り添いりレー」

やっと洗濯が終わった、と思ったところに、同居している夫のお母さんの洗濯物が出てきた。イライラしていると、今度は、郵便屋さんが来た。手を止められたことに、またイライラ。私宛ての小包だった。中身は、防水シート。義理のお母さんの介護が始まった私に、介護経験のある友人からのサプライズだった。お礼の連絡をすると、「買い置きしていたのが出てきたんだよ。すぐく助かった優れモノだから、使ってみて」。プレッシャーにならないように、応援してくれている彼女の優しさが伝わってくる。ささくれだっていた心のとげがちよつと引

っ込んだ。私も、彼女のように、そつと寄り添える人になりたいと思った。

*

ある時、友人が主催している子育てサークルのお手伝いに行った。わが子はみんな成人し、大人ばかりの生活で、癒し要素が欠けていたので、久しぶりの赤ちゃんにとっても癒された。介護生活の中でのちよつとした気分転換でもある。部屋の中央では、子どもやお母さんたちが集まって、楽しそうに遊んだりおしゃべりしたりしている。そこから離れた隅っこのほうで、大きな声で泣き続けている赤ちゃんがいた。初めての場所で不安なのだろう。

その赤ちゃんのお母さんも、せつかく来たのに、他のお母さんたちとお喋りすることもでき

ず、あやし続けていた。お母さんまで泣きそう
だ。私は、「初めての場所で不安になってるん
だね」と声をかけた。「こんなに泣くのおかし
いですか？うちの子だけですか？検診に行っ
た時も泣き止まないんです。みんな泣いていな
いのに。楽しそうに遊んでいるのに」。畳み掛
けるような質問に、お母さんの心細さが伝わっ
てきた。

「大丈夫だよ。みんなそうだよ。うちの子も
よく泣いていたんだから」

「そうなんですか？うちの子だけじゃない
んですね」

「そうだよ。だから、全然大丈夫！」

ほっとした様子で、少しだけお母さんの顔が
和らいだ。

泣きじやくる赤ちゃんをあやしながら、息子
のことを思い出した。人がたくさんいるところ
が苦手で、よく泣いていた。子育てサークルに
ボランティアで来ていた方に「こんなに手がか
かる子は初めて」と言われ、悲しくなった。も
うサークルに行くのは止めようと思っっている
と、そばにいた先輩ママさんが、「元気な証拠。
大丈夫、大丈夫。またおいでー」と声をかけて
くれて、すごくほっとしたことを思い出した。

わが子は、可愛くて、愛しくて、子育ては、
幸せな気持ちもたくさんもらえるけど、それと
同じ量の不安や心配もついてくる。常に不安な
気持ちを抱えながら子育てしていた自分と重な
り、お母さんの話をゆっくり聞かせてもらった。
お母さんがほっとしたからか、場の雰囲気にな

れたのか、赤ちゃんもご機嫌になって遊び始めた。
た。

*

社会人1年生の娘と久しぶりの買い物デートの帰り、お土産にドーナツを買うことにした。

お店は、長蛇の列。並んだ前には、バギーに乗った1歳ぐらいの男の子とお母さん。男の子は、ぐずっているが、お母さんは、疲れている様子で、あやすこともなくスマホを見ていた。「神様のお導き」と感じた私は思わず、「かわいいねー！いくつ？」と話しかけた。娘は、「またママのおせっかいが始まった」と、あきれ顔。

「1歳です。すみません、うるさいですよね」と、すぐに謝るお母さんに、胸がギュッと締め付けられる。私は、「ぜんぜんうるさくないよ！

むしろ、可愛くて、癒されてるよ」と伝え、坊やをあやした。バギーから出たがっている坊や。抱く気力もないお母さん。私は心の中で、「どうぞお母さんの心が穏やかになりますように」と祈り、アルコール消毒液を出して、「ほら、消毒したし、抱っこしていい？」と言うと、お母さんは驚いた様子で、「全然いいですけど、いいんですか？」と笑ってくれた。抱っこすると、坊やは泣き止み笑顔になった。「これぐらいの時が一番大変だよねー」と、お母さんへのエールを込めて、自分が子育てしていた頃、「やってほしかったこと」「されてうれしかったこと」を、ついやってしまう。

お会計が終わる頃には、お母さんも笑顔になっていた。にっこり笑顔で、「ありがとうございます

いました！」と帰って行った。後ろ姿を見送りながら、娘がぽつりと、「前は、おせっかいだと思ってたけど、こういうの必要だよね」と言ってくれた。娘も、働きはじめて社会で揉まれているだろう。いろんな体験をして、寄り添う大切さを感じているようだ。私は、「オーバーかもしれないけど、世のお母さんが助かったら、世の中の悲しい事件とか、半分ぐらい無くなるんじゃないかと思うんだよね。だから、『お母さん』を助けたくなるんだよね」と話すと、「ほんとだね」と共感してくれた。

*

ささいなことでも、「されてうれしかったこと」「してほしかったこと」をすれば、寄り添いのリレーになるように思う。そんな寄り添い

のリレーでつながる世の中になったらいいなあ、と願いながら、おせっかいおばさんを楽しんでいる。



《こころの散歩道》

「心強い味方」

私が特別養護老人ホームで働いていた時のことだ。

入社した時、介護現場は常に忙しそうで、早く1人前にならないと他の職員に迷惑を掛けてしまう、という焦りがあった。そのせいか、仕事の速さばかりを求めてしまい、利用者さんの気持ちを考える余裕がなかった。しかし、そんな時に事故が起こった。

私がおやつ介助をしている方が、ゼリーを喉に詰まらせてしまったのだ。唇がみるみる紫色になり、大変なことになってしまった。幸いに

も、ゼリーを吐き出してくれ、大事には至らなかったが、私の手足は震え、ヘタヘタと座り込んでしまう程だった。もしかすると、自分のせいで、この方を死なせてしまったかもしれない、とても怖くなった。

その日から、仕事の速さよりも、利用者さんにとって良い介護を意識し始めた。あの怖さを忘れないように、ロッカールームで着替える時に、「どうぞ、利用者さんにとって良い介護ができますように」と心の中で唱え、手を合わせてから現場に出るようにした。

そんなある日、ある利用者さんから、呼び出された。そして、「あなたは何か信仰をされている？」と尋ねられた。私は驚きながらも、「実は金光教を信仰しています」。そう答えた。そ

の方は、「やつぱり。あなたは何か違うと思っ
ていた。この前の夜、私が不安で眠れなかつた
時、あなたは仕事の時間外なのに、私が落ち着
くまで一緒にいてくれた。どれだけ心強かつた
か。信仰があるってことを聞いて納得したわ」。
そう話してくれた。さらに、違う日には違う方
から、「あなたの手はあつたかいね」。そう言
われた。体温が、という意味ではなく、「優し
いね」ということのような。すぐくうれしかつ
た。いったい私の何が変わったのか。あの事故
から、私の介護の技術が上がったわけではない。
毎日ロッカーで手を合わせるようになっただけ
だ。何か私を手伝ってくれているような感じ
がした。

*

毎日、息子をお風呂に入れるのは、私の役目
である。息子もありがたいことにお風呂が大好
きだ。お風呂ではいろんな事がある。赤ちゃん
の時は、湯船でおしっこをされたり、うんちを
されたり。今となってはどれも良い思い出だ。
そんな息子が1歳の頃、その日はお風呂で遊
ぶアヒルのおもちゃを買って帰った。お風呂に
入った時、おもちゃをジャンと出すと、キラ
キラした目で喜んでくれた。しかし、そのおも
ちゃを湯船に浮かべると、急にギャーツと泣き
出して、おもちゃを湯船の外に出した。「えっ
なんで？」。そう思いながら、少し落ち着いた
頃に、もう一度湯船におもちゃを入れてみた。
しかし今度も泣き出し、自分が溺れそうになり
ながらおもちゃを外に出す。私は思っていた反

応と違ったので、心配になった。

それから半年が経った頃、もう大丈夫だろうと、再びおもちゃを浮かべてみた。すると、またあの時と同じように、ギャーッと泣いておもちゃを湯船から出した。いよいよ心配になった。

その時、「あつ、そうだ。神様にお願ひしてみよう」と思った。というのも、かつて親から、「心配な時や困った時は、神様にお願ひしたらいい」と教えてもらったことがあったからだ。

そこで、神様に、「息子が湯船におもちゃを入れるのを嫌がります。なぜ嫌がるのか分からず心配です。どうぞ教えてください」とお願ひを試してみた。その時は、何の答えも無かった。しかし、その後、息子のある言動にハッとさせられた。息子のミニカーが廊下に散らかっている

のを見て、私は危ないなあと、とっさに足で脇

へよけた。するとそれに対して息子が血相を変え、「もーっ」と言つて怒つてきた。おもちゃ

を大切にしているのは知っていたが、息子はおもちゃに「命」を感じていたのだ。そして、その日の晩、もう1度お風呂でおもちゃを浮かべてみた。その時はいつもとは違い、「怖い!!」

と言つて泣きながら必死に外に出した。私は、その「怖い」という声で、息子が昔、お風呂で溺れた時のことを思い出した。息子がヨチヨチ歩きの頃、湯船に浮かんだボールを取ろうとして、誤つて湯船に落ちてしまったことがある。幸いにも近くにいたので、助けることができたが、息子は私にしがみついて離れなかった。相当怖かったのだと思う。そのことが、おもちゃ

に命を感じていることと結びついた。もしかすると息子は、「僕の大切なおもちゃが溺れてしまふ。かわいそう」と思い、湯船の外に出していたのではないか。そう思えてきた。そして息子にそのことを尋ねてみた。すると、「うん」とうなずく。私は、そうだったのかと息子の頭をなでながら、「このおもちゃは溺れないから大丈夫!」。そう言うと、息子は涙を拭い、うれしそうにお風呂におもちゃを浮かべて遊び出した。今では邪魔なくらい湯船いっぱいに浮かんでいる。

息子の優しい心に喜びを感じ、そして、問題を解決に導いてくれた神様に、「ありがとうございます」と手を合わせた。私は、これからも、この心強い味方を頼っていこうと思う。



《こころの散歩道》

「グミの木の下で」

わが家のグミの木が、今年もまた、枝もたわわに真つ赤な実をつけた。サクランボを楕円形にしたような見た目で、渋くて酸っぱいその味は、毎年わが家に初夏の訪れを告げる。

すすくすと伸びたグミの枝は、実の重さに耐えかねて、いけがき生垣を越え、通行人の頭上に垂れ下る。

年輩の人にとっては、グミはきょうしゅう郷愁を誘うよ
うだ。

「グミですな。懐かしいなあ。あ、いいですか。じゃあ、ちよつと失礼して1つ…。あーっ、この味。昔はどここの家にもありませんたよな。誰

が取って食べても叱られない、いわば、子どもたち共有のおやつでね、巡り歩いて味比べしたこともありましたよ」

人間同士の温かい結びつきの中で育まれた幼い頃の思い出。グミの味は、そんな遠い記憶を呼び覚ます鍵になったようだった。

道に張り出した枝は、ちよつとお邪魔かもしれないけど、せんてい剪定するのは実の時期が終わってからにしよう。皆さんどうぞご自由に。

*

おばあちゃんが押すベビーカーに寄せられて、2歳ぐらいの男の子がグミの下を通りかかった。木漏れ日の中にきれいな赤い実が輝いている。男の子はパツと目を輝かせ、指さして、「あっ、あっ」と声を上げる。私が「どうぞ」

と手真似すると、おばあちゃんは会釈して、1
つ摘み取り、口の中に入れてやった。男の子は
うれしさを満面に表してモグモグし始めたが、

突然口の動きが止まった。人生初の渋味と酸味
に驚いたのだろう。これはいったい何なのかと、
難しい顔で考え込む男の子に、おばあちゃんは
すかさず、「グミだよ。おいしいねえ」とニコ
ニコ顔で声をかける。男の子もつられてニコニ
コし、この味も「おいしい」の範疇はんちゆうに入るの
かと納得したようだった。

人間が何をおいしいと感じるかは、経験によ
るところが大きいと言われている。苦いはずの
コーヒーをおいしく感じるのも、その味が、休
憩時間の安らぎや楽しさと記憶の中で結びつい
ているからなのだとか。

「おばあちゃんと楽しい時間をたつぷり過ご
して、おいしいものが増えるといいね」と、私
は心の中で応援した。

*

それにしても、このグミの枝は伸び過ぎだ。
実はまだついたままだけど、道路にはみ出た枝
を切り落とすことにした。脚立のぼに上って剪定鋸せんていのこ
で大枝を切り、ビニールシートの上に落として
いく。

気づくと、下校中の女子高校生が1人、ポカ
ンと私を見上げていた。名前は知らないけれど、
あいさつだけは交わす顔見知りの女の子だ。

「ちょうどよかった。その枝についてるグミ、
ゼーンぶ持って帰っていいよ。ジャムにしてご
らん。とってもおいしいから」

私は家の中から紙袋を持って来て、いっしょにグミを収穫した。彼女はずっしり重い袋を抱え、ちょこんとお辞儀をして帰りかけたが、すぐまた戻って来た。そしてカバンの中をゴソゴソ探り、干しぶどうパンを1つ。

「学校の売店で買ったんですけど、どうぞ」
私は「そんな、気を使わないで」と言いそうになったが、断ったらかえって恥ずかしい思いをさせてしまいそう。

「まあ、おいしそうなパン。ありがとう！」
大喜びで受け取ると、彼女は照れくさそうに小走りで帰って行った。教科書の重みで半分つぶれたパンは、しみじみと愛おしく、おいしかった。

翌日、見知らぬ女性が、「うちの畑で穫れま

した」と、たくさん野菜を持って訪ねて来られた。

「昨日は孫が大変お世話になりました。人話するのが苦手で、引きこもりがちな子なんですけど、昨日親切にしていたのが本当にうれしかったようで、歌を歌いながら帰ってきました。さっそくグミで、何か変わったものを作ってくれまして、私も初めての料理を食べさせてもらいました」と、大いに喜んでくださった。彼女は何を作ったのだろう。

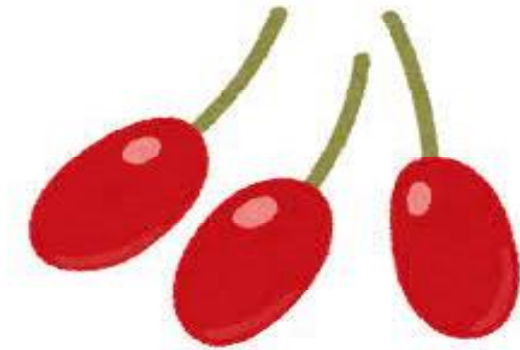
こういうことがあるので、グミの木の存在は本当にありがたい。

でも、油断はできない。ヒヨドリに狙われたら最後、1日で実がすっかり食べられてしまうのだ。野鳥の襲来に目を光らせている私を見て、

夫は笑う。

「グミの実は、人間だけのものじゃない。そんなに欲張らずに、鳥にも分けてやったらいいじゃないか」

ほんとに夫の言うとおり。だけど私は、やっぱりいろんな人の笑顔が見たいのだ。ヒヨドリさんには悪いけど。



《こころの散歩道》

「思いのすれちがい」

私は生まれも育ちもずっと関東。一方、妻はというと、大阪生まれの大阪育ち。結婚してから私たちは、生活の拠点を大阪に置いています。

何かと対比されることの多い関東と関西の文化ですが、結婚してすぐに、こんなことがありますました。

妻が夕食の準備をしていた時のことです。まな板の上には鶏肉。それを見て、「今日はお肉だね」と声を掛けると、妻は「違うで」と返してきました。私は「えっ!？」と思いました。見直してみても、まな板の上には鶏肉があります。

もう1度尋ねてみても、妻の答えは同じ。「ど

うして通じないんだろう?」。私は困惑しました。関西の人ならば、この噛み合わない会話の原因が、もうお分かりかもしれませんね。それは、私の発した「肉」という単語です。妻は私にこう言いました。「お肉といえば、牛肉のことですよ。今日は、鶏肉やからね」って。私の中では、「牛肉」も「豚肉」も「鶏肉」も、みんなまとめて「肉」だったので。なので、妻の「お肉は牛肉」という言葉にびっくり。そして、鶏肉は「トリ」「トリニク」もしくは「かしわ」と言うそうで。その後しばらく、妻と「肉」にまつわる食談議になりました。

(私) 「じゃあ、カレー用の肉は?」

(妻) 「もちろん牛肉。カレー用の肉として、肉屋さんでもゴロッとした牛肉が売ってるよ。」

関東では違うん？」

(私)「基本、豚肉だよ。カレー用の肉としてお店で豚肉が売られているよ。だから、牛肉のカレーは、わざわざ『ビーフカレー』って言うからね。肉じゃがも、豚肉が入っていたな」

(妻)「えっ！ そうなん。こっちでは肉じゃがは牛肉が定番だよ。じゃあ、すき焼きは？ それも豚肉？」

(私)「それは、牛肉だった」
みたい。

調べてみると、国内の牛肉の消費量が多い地域の上位には、近畿勢が名を連ねていました。関東と関西の食肉事情の差にびっくり。でも、どっちもおいしく、どっちも良い。思い込みをリセットすると、世界が広がるものです。私に

とっては、カレーや肉じゃがは豚肉が定番だったので、それが牛肉になって、とてもリッチな気持ちになりました。

*

私と妻の大阪生活も、今年で12年になりました。

ある日の夕方。妻が、夕食の下ごしらえをしたあとに、翌日の仕事の準備のために買物に出かける時のことです。妻は私に、「鍋を火にかけてあるから、気をつけてくれる？ 水分がなくなってきたら、水を足してね。お願いね」と頼んできました。台所では鍋がぐつぐつと音を立てて、具材が煮込まれていました。妻を送り出し、私は、「今晚は、シチューかな？ カレーかな？」なんて思いながら、何度もお鍋の様子を

確認しました。そして、子どもと一緒に食卓の上も片付けることにしました。帰宅した妻に、

「おかえり。ちゃんと、見といたよ」と、声を掛けました。ミッションをクリアして、さらに片付けまでした。褒めてもらえと思ったのです。

しかし、鍋の様子を見た妻の顔は、「ありがとう」と言いつつも、どことなく残念そう。

私は「えっ」という気持ちになりました。そして、なぜ不満そうなのか、妻に聞いてみました。

「別に」と言う妻にしつこく「教えて」と言うと、妻は「カレーのルーを入れておいてくれればいいのと思ったの」と言うのです。私は、つい、「えっ。聞いてないよ。シチューかカレーか分からないし、間違ったらいけないと思って」と言いました。「シチューの素は、今、

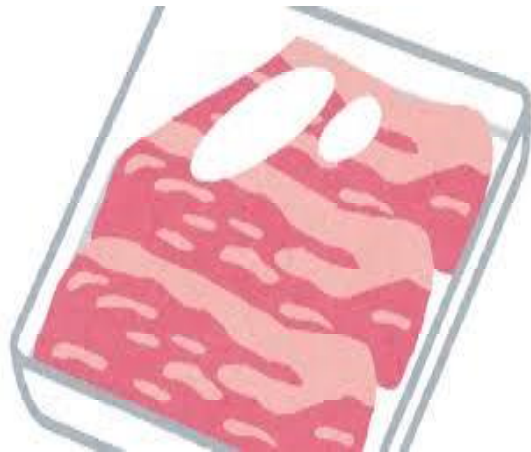
ないの。だから、カレーなの」と言う妻。ちぐはぐなやりとりで、その時は、微妙な雰囲気になりました。妻が「ごめん。言わなかった私が悪いの」と言って、その場は何とか収まりました。

後で聞いてみると、妻は「自分も無理なことを言っているな」と思っていたそうです。そして、私もこう思いました。「あの日、妻は子どもを習い事に連れて行き、夕食の下ごしらえをして忙しく過ごした夕方、買物にも出掛けてくれたのだから、疲れていたんだろうな。一生懸命してくれてありがとう、という感謝の気持ちと一緒に、言われた事だけじゃなく、妻がどうしてほしいのか、もう少し考えたらよかったな」と。

*

「こうだろう」という思い込みは、誰にでもあることです。そこから、心ときめく驚きや感情が生まれることもあれば、一触即発のドキッとするような展開につながることもあります。ドキッとする時には、一度立ち止まって、お互い相手の気持ちを考えてみるのが大事なのでしょう。

人と出会い、関わりながら私たちは生きていきます。相手を知るということは、自分自身の幅を広げる機会なのかもしれません。あなたの今日の出会いが、良い機会となりますように。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 日曜日 あさ5時40分

放送センターHP
「ここで聴く
おはなし」



「ここで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。